

農作物技術情報 第3号 花き

発行日 令和4年 5月 26日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ りんどう 適期定植、適期防除（特にリンドウホソハマキ）に努めましょう。
- ◆ 小 ぎ く 適期作業に努め、白さび病防除を徹底しましょう。
- ◆ 共 通 圃場が乾燥する場合は、かん水しましょう。

りんどう

1 生育の状況

露地栽培の生育は、平年並みとなっています。県南部の極早生種では側芽発生期を過ぎ、着蕾が始まっています。また、昨年より葉先枯れ症状の発生が多くなっています。

病害虫は、リンドウホソハマキの成虫の発生が始まっています。一部地域でハダニ類の発生がみられています。

県内の各地域で6月上旬から本格的な定植作業が始まる見込みです。

2 圃場管理（採花年）

（1）株仕立て

株当たり8～10本を目安に残し、草丈30cm頃までに終えるよう計画的に進めます。

（2）かん水

5月下旬から6月は茎葉が最も伸長する時期で、水分や肥料を多く必要とします。肥料の吸収には土壌水分が必要なので、土壌が乾燥した都度かん水を行います。ただし、30℃を超えるような高温時のかん水は、根に高温障害を発生させる可能性があるので避けるとともに、通路の長時間滞水にも注意します。

圃場の乾燥が続くと、葉先枯れ症状が発生しやすくなります。葉先枯れがみられる圃場では、かん水を徹底するとともに、生育初期からの定期的な石灰資材の葉面散布により、発生の軽減を図ります。

（3）追肥

基肥として「りんどう専用肥料」等の化成肥料を用いた場合、追肥時期の目安は側芽発生期（葉の付け根に腋芽が発生する時期）となります。北上市付近における平年の側芽発生期は、早生種で5月下旬から6月上旬、晩生種で6月中旬から下旬ですが、気象経過による年次変動が大きいので、圃場を観察して適期に施用します。

定植時に「りんどう定植2年肥料」を用いた場合は、基本的に2年目の施肥は不要です。

（4）ネット管理

フラワーネットの最上段が草丈の7割程度の位置となるよう草丈の伸長に合わせて調整します。

6月は茎葉が伸長する時期です。ネット上げ作業の間隔を短くし、茎の曲がりを防ぎます。

(5) 雑草対策

圃場内及び周辺の雑草は、ハダニ類やアザミウマ類の繁殖場所となるので、畦畔の草刈りや通路の除草を早めに行います。また、通路の防草シート設置や除草剤の利用などにより、できるだけ手取除草や機械除草を減らして省力化を図ります。

3 畑づくり（定植年）

(1) 圃場準備

天候を見ながら計画的に畑づくりを進めます。堆肥は完熟したものを用品ですが、熟度に不安がある場合は、早めに施用して土と混和しておきます。

排水不良圃場では、明渠や排水路の設置等対策を講じます。定植年の生育状況が2年目以降の生育に大きく影響するので、排水対策はとても重要です。

作畦後、土壌処理タイプの除草剤処理により、一定期間雑草の発生を抑えることが可能です。

(2) 定植

定植に適した苗は3～4対葉です。老化苗定植とならないよう計画的に定植作業を進めます。また、ジベレリン処理を行った苗は、苗の軟弱徒長を防ぐため、遅くとも処理後2、3日以内に定植します。

晴天時の定植では、セルトレイを長時間直射日光下に置かないよう注意します。また、抜き取った苗をマルチ上に置かないようにします。

定植後は植え穴へ十分量かん水し、床土と苗をなじませます。初期生育を促すために、薄めの液肥をかん水代わりにかん注する例もみられます。定植から1ヶ月程度は乾燥に弱いので、その間は特に水分管理に留意します。

4 病虫害防除

(1) 葉枯病

今年の発生は今のところ少ない状況です。降雨が多くなると発生しやすく、例年、梅雨入り後に拡大する傾向がありますので、定期的な薬剤散布によって予防防除に努めます。

(2) リンドウホソハマキ

県中部では昨年と同時期の5月中旬から越冬世代の成虫の羽化が確認されています。成虫や幼虫の潜葉痕及び頂部の食害が認められたら防除を開始します。産卵の大部分は葉裏に行われるため、下位葉の葉裏までしっかり薬剤がかかるよう、丁寧に散布します。

茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、被害茎を見つけたら折り取り処分します。



成虫(体長5～6mm)



孵化幼虫の潜葉痕



頂部の食害

(3) ハダニ類

下葉の裏の寄生状況を観察し、発生を見たら直ちに防除を開始します。ハダニ類は薬剤抵抗性を獲得しやすいので、同系統の薬剤は年1回の散布とします。併せて、発生源となる圃場内及び周辺の除草を行います。

小ぎく

1 生育の状況

8月咲品種の定植は、平年どおり4月下旬から5月上旬となりました。定植後の生育は概ね順調となっています。

9月咲品種の育苗は、平年どおり5月上旬から始まり、5月下旬から定植が始まっています。

病害虫では、白さび病が一部の圃場で苗からの持ち込みと考えられる本畑での発生がみられます。また、一部地域で親株にアザミウマ類の発生がみられています。

2 定植後の管理

(1) かん水

定植後に土壤水分が不足すると生育が停滞し、側枝数や切花長の不足の要因となります。乾燥が続く場合は、適宜かん水を行います。

(2) 摘心

摘心は、定植後に活着を確認してから芽の先端部を小さく摘み取ります。作業後は圃場を何度か確認し、摘心のやり残しや不完全な摘心がないようにします。

(3) 整枝

整枝(株仕立て)は、側枝の長さが20～30cmの頃に行います。株当たり3本残して他の枝は除去しますが、草勢の強い品種では4本仕立ても可能です。残す枝の判断については、強い枝を残すと他の枝の生育が悪くなるので、できるだけ生育の揃った枝を残すようにします。

(4) 土寄せ

無マルチ栽培の場合は、土寄せを行い生育の促進と雑草対策を図ります。側枝が10cm程度伸びた頃と、整枝を行ったあとの2回が実施時期の目安です。

3 病害虫防除

(1) 白さび病

品質・収量に大きな影響を及ぼす可能性があるため、年間を通じて防除に留意します。育苗期に発生した場合、苗からの持ち込みによって本畑でも発生しやすくなります。また、降雨が多くなる梅雨時期に発生が増えるので、今後注意が必要です。薬剤の選定は各地域の防除暦等を参考としますが、発生状況に応じた「予防剤」と「治療剤」の適切な使い分けが重要です。発生後は治療効果の高い薬剤を散布します。

(2) キクわい化病

わい化病に感染した株は治癒する可能性はなく、治療薬也没有。圃場に残すことで他の株への伝染源となります。親株として使用した場合は挿し穂に伝染するので、見つけ次第抜き取り処分します。



小ぎくの白さび病（葉裏）



小ぎくのわい化病

（３）害虫

今後、ハダニ類、ハモグリバエ類、アブラムシ類及びアザミウマ類に注意が必要です。発生状況の観察に努めて早期防除に留意するとともに、発生・増殖源となる雑草の防除を行います。

春の農作業安全月間 [4月15日]

「農作業 ゆとりと声かけ 二刀流」

山火事防止運動月間 [3月1日]

「山火事を 防ぐあなたの 心がけ」

岩手県では例年3～5月に、野山が乾燥し、野焼きが原因と思われる林野火災が多発しています。やむを得ず野焼きを行う場合は、消防署に届け出たうえで、火の取り扱いに十分注意しましょう。

次号は6月23日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。